

両重因縁(りょうじゅういんねん)

ご讃題 まことに知んぬ、徳号の慈父ましまさずは能生の因闕けなん、光明の悲母ましまさずは所生の縁乖きなん、能所の因縁和合すべしといへども、信心の業識にあらずは光明土に到ることなし、真実信の業識、これすなはち内因とす、光明名の父母、これすなはち外縁とす、内外の因縁和合して報土の真身を得証す、

(「行文類」二 両重因縁、註釈版聖典 P187)

一、両親を送って

「お父さんも、お母さんも安らかに往生なさいましたね」と両親の姿を知る方々がお声をかけて下さる今日この頃であります。

父は、三年前永代経を務め終わった後「これで思い残すことはない。」と称して、自ら食と薬を絶ち、二週間後に往生しました。

一方、母は、肺炎の傾向があるので抗生物質を投与し酸素吸入をしたその日の夜に急に症状が進んで夜半に自然に息が落ち往生しました。

施設に入った半年間は、心は生まれ育ったお寺に帰っていましたから、おそらくは懐かしい祖父母ともであっていたことでありましょう。およそ死の床で苦しむということが見えない安らかな往生でありました。

かくして両親の往生により、親と子の関係では、上は直接、無為涅槃界となってしまうました。そこはお念仏のふるさとでありますから、お念仏により両親に会えるばかりであります。

とは申せ、ずっしりと胸の奥深くに一言で悲しみなどという言葉では

言い尽くせない何かがあるのも事実で、それは凡夫の心の持ちようであるうにかなるようなものではなく、ただ、仏徳讃歎のお言葉にお尋ねしてはその深いお心に包まれてやっと首肯し軽くなり、時には深い慶びに変化しているように思われるのです。

母との別れに臨んでは、南米の新発意から手紙が届きました。

「たった今、不思議と口から唯お念仏があふれ出てくるのは、今、お婆ちゃんは確かに目に見えない人にはなりましたが、私を包みこんで下さる、阿弥陀様と一体となって何時までも何時までも側にいてくださっているからですね。お婆ちゃんありがとう。お浄土でまた会いましょう。」

これは、その一節であります。わが子の口から期せずしてお念仏のお味わいの言葉を聞いたのはこれが初めてであります。

二、両重因縁

そこでこの機会に、親子の縁について親鸞聖人が直接、教行信証の中で語っていらっしゃる「両重因縁(りょうじゅういんねん)」にお尋ねしてみることです。ご讃題はその御文であります。

浄土真宗は、南無阿弥陀仏のお名号による救いでもあります。

親鸞聖人は、南無阿弥陀仏のお六字を釈して「お六字は如来様が御本願のお心から私に向かって目覚めよと仰せになり、お願いだからわが国浄土に生まれたいと願っておくれとおっしゃる意味だ」と仰せであります。

そのお喚び声はいつでも届いているのですが、それを疑いなく聞きとめるときに初めてわが胸に信心となって宿って下さることです。

ですから信心を語るにはお名号との関係を語るのが通常のロジックだということになります。

ところが親鸞聖人は、両重因縁では、光明の悲母と徳号(お名号のこと)の慈父というおたとえをなさいます。光明無量、寿命無量というのは、阿弥陀仏のお徳であり、そのお徳はお名号に込められてあるのですから、光明は通常は寿命との対比で語られるのでありますが、ここでは、光明を悲母に、徳号を慈父におたとえであります。

信心は、その両親から誕生するのだというのであります。やがて衆生を浄土に導いて下さる種であります。お名号の慈父と光明の悲母の因縁によって私自身をやがてお浄土に誕生させて戴く信心が誕生して下さるのだというのです。これが初重の因縁です。

種は植物が生育する直接の原因であります。しかし、折角、種が誕生したとしても、そこに適切な水分や養分、太陽の光という間接的な縁に恵まれなければ、植物は一人前に育つ(衆生がお浄土に生まれる)ことはできません。

信心の種にはお名号と光明の縁がなくてはならないのだとおっしゃるのです。この場合、徳号の慈父は衆生の体の内側からお育て戴くお乳に譬えられます。お法(みのり)によるお育てですから、昔の人はこれを法乳(ほうにゅう)と称されました。植物なら水分や養分がこれに当たります。

一方、光明の悲母は外側からお育てに与る丁度太陽だと考えられます。これは調熟(ちょうじゅく)の光明と言われるものであります。

信心を頂戴するプロセスは、如来様の本願招喚の勅命に対して、既に、疑いの蓋が取り払われさえすれば一瞬にして頂戴するという仕組みであることはこれまでに何度も頂戴してきたことでもあります。

ところが、信心というのは一旦頂戴したからそれで浄土往生は間違い

なしと言ってうっちゃっておけるものではありません。

信心の種を頂戴した衆生がやがて浄土往生させて戴くまでにはじっくりとお育てに与ることあります。これが後重の因縁です。

これには時間が掛かります。そのお育てに際してはお名号が如来の赤子に与えられる法乳となって働いて下さり、光明が暖かく周囲から包み込むようにお育て下さるお日さまの光だというのであります。

遙かな昔、この世に誕生したばかりでまだ私自身の意識も明確ではない一・二歳の頃を振り返ってみますと、それは家中の暖かいまなざしが注がれてあったように思われます。

それから、私は母乳と一身に注がれる父母・祖父母の暖かい眼差しの只中に一人前にお育てに与ったことを有難く振り返ることあります。幸いに、長じて如来様のお喚(よ)び声に喚び覚まされてからというもの、お名号の法乳と無碍の光明によるお育てを被っていることあります。

如来様から賜る信心が浄土往生の真因であるとおっしゃる親鸞聖人が、お名号と光明によるお育てについてお説きになって下さることは大変有難いことあります。

信心の種が誕生する初重の両親の因縁と種がお育てに与る後重の因縁によって、私はお浄土に誕生させて戴くのであります。

合掌(玄宥記)。

正覚寺永代経 六月二十日十四時、二十時、お客僧 岡 玲師  
正覚寺仏教壮年会例会 毎月第一日曜午後八時より  
正覚寺仏教婦人会例会 毎月十六日午後七時より  
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)  
〒五二〇 〇五〇一 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax 0七七 五九六 〇一六六  
☎・📧・mhkatata@pluto.dti.ne.jp 使務 堅田玄宥